

文化財報告 第7集

東久保遺跡発掘調査報告書

大井町教育委員会

序にかえて

大井町は近年来の人口急増にともなう児童数の増加のため、毎年学校建築に追われておりますが、昭和 52 年度開校するため買収した亀久保小学校用地は、埼玉県発行の「埼玉県遺跡地図」によると、埋蔵文化財（古代住居跡）が包蔵されている可能性がきわめて高いとされております。そこで、教育委員会として、学校の建築に先だち、現地調査をしたところ、地表面から土器片が採集され、また過去においても、この近辺では、農耕のおり縄文時代の壺ほか土器片が数多く採集されました。これらのことから緊急に発掘調査を実施することにしたものであります。

この発掘調査は、担当者に川越高校の小泉功先生を迎え、昭和 51 年 6 月 29 日から約 1 カ月を要して行いましたが、この調査にあたり、専修大学の坪田幹男氏はじめ、郷土研究会員、川越高校生など多数の方々の御理解ある御協力があり、予定通り完了できましたことに対し深く感謝申し上げるとともに、この報告書が、地域史研究のために寄与することを願う次第であります。

大井町教育委員会教育長

小 山 隆

例 言

1. この報告書は、埼玉県入間郡大井町大字亀久保字東久保 285-1 (284-1、286) 番地に所在する東久保遺跡の発掘調査報告書である。
2. 東久保遺跡の発掘調査は、当地域に大井町の小学校を建設するにともない、事前に実施した。
3. 発掘調査は大井町教育委員会が主体となり、小泉功が委託を受けて担当者となり、昭和 51 年 6 月 29 日から 7 月 27 日まで実施した。
4. 発掘調査後の整理、図版作成は坪田幹男、小泉功が分担した。
5. 報告書の執筆は坪田幹男、小泉功が分担し、最終的には小泉功が加除筆訂正した。
6. 編集は坪田幹男、小泉功、先山利男がおこなった。
7. 発掘調査の組織、並びに発掘調査の参加者は次のとおりである。

主 体 者 大井町教育委員会

発掘調査

担当者 考古学協会会員

県立川越高等学校教諭

小 泉 功

調査員 専修大学

坪 田 幹 男

調査協力者

島田一郎、三上七五郎、西山茂治、内田喜之助、神木繁嘉（以上文化財保護審議委員）、長岡史起（早稲田大学）、川越高校郷土部、郷土研究会

例言

插图目次

目 次

図版1…〔1〕東久保遺跡全景(北より)
〔2〕1号井戸
〔3〕2号井戸

図版2…〔1〕1号溝(西より)
〔2〕2号溝(北西より)
〔3〕集石土壙
〔4〕土壙(南より)
〔5〕表採遺物(打製石斧)

I 遺跡の立地と環境

大井町は埼玉県南の東寄りに位置し、東武東上線「上福岡駅」の南西部にわたってひろがる地域で、川越街道が町の中心部を南北に貫き、近世には宿場町として殷賑を極め本陣跡をはじめ歴史的環境が武蔵野の自然と共に、よく保存されている風致地区でもある。しかしその景観も急速に都市化の波が押しよせ変貌しつつある。

この大井町は武蔵野台地の北東部に位置し、全町がほぼ関東ロームの洪積層におおわれ、平坦な台地が広がり標高 20 m から 30 m を計り、その比高約 10 m 内外である。



第1図 東久保遺跡の立地と周辺の遺跡分布

東久保遺跡（第1図1）

大井町大字亀久保字東久保 285-1、284-1、286 番地に位置し、新河岸川にそそぐ江川の支流で俗称東久保水路といわれる小川によって形成された台地南緩斜面に位置している。埼玉県遺跡台帳には大井町 22 の地点が古墳時代の集落址として記載されている。おそらく表面採集で土師器片が若干検出されたことから遺跡台帳作成者によって認められたことによると思われる。事実、私たちも予備調査の段階で若干の土師器片と縄文中期の土器片や石器を採集したが、調査結果から判断すると、これら遺物出土諸遺構群は当

地域の西北側に広がる小高い台地上に存在したと考えられる。従って当発掘調査地域はこれらの遺跡の縁辺部に属するといえよう。

西の原遺跡（第1図2）

大字苗間字西の原122、144番地一帯に所在し、東久保遺跡より東南へ約1 Kmはなれた台地上に位置する。遺跡は畑地約6 haにわたって広がりをもっていると思われる。

昭和46年7月苗間123の1番地の約900 m²が天地がえしに先がけて発掘調査を行なった。その結果、縄文中期（加曾利EⅡ式）の住居址1軒と同時期に属する4基の土壙が検出された。竪穴住居址の規模は、比較的大きく南北7.8 m、東西6.7 mに達する橢円形のもので、土壙は本住居址が廃絶された後に、その堆積土を掘り込んで構築されたものである。

大井戸跡遺跡（第1図3）

大字大井字東原219に所在し、大井町の地名由来の井戸遺構で昭和50年度発掘調査（註）がおこなわれた。発掘された井戸は、南北に長い橢円形で長径1.8 m、短径1.5 m、現地表面から底面までの深さ約3 mである。大井戸の特徴は、井戸底の西側寄りに人頭大の河原石を三段に組みかさねた円形の石組み遺構（まなこ）と、井戸上縁部より約15 cm盛られた土手状敷石面である。当井戸跡が武蔵野の歴史時代の究明に新しい資料を提供することを期待する。

（註）「大井戸跡発掘調査報告書」大井町教育委員会 1976年

東台遺跡（第1図4）

縄文中期、鎌倉時代の墓跡、戦国時代の野鍛冶跡、曾称川の左岸の台地縁辺部に位置する。墓跡からは青石塔婆が確認されている。

織部塚（第1図5）

大井字小田久保1213番地に所在する、徳性寺の古道を西に入った所にある小塚を古老たちは織部塚と称している。古老の話によると、中世の頃、大井郷の開拓に力をつくした大井四人衆の一人、新井織部を埋祀した塚であると伝えている。現在塚上には松の若木と新井織部氏の子孫と称する人の手によって建てられた日神皇の石碑がある。また織部塚は、小田久保遺跡（縄文中期の集落跡）の範囲内にあり、曾称川の左岸台地縁辺部に位置する。

尚、東久保遺跡の西約150 mの江川の左岸台地斜面上に所在する位置に、縄文中期の土器片及び旧石器時代の石器類が表採されている。また旧石器時代の石器類は、大井戸南側の、曾称川右岸台地端上からも出土し、第1図の6からも確認されている。

（小泉 功）

Ⅱ 亀久保の歴史的環境

亀久保の歴史は徳川時代初期から始まるものと思われるが、原始古代も人が住んでいた。江川をはさんだ両側の台地から縄文時代中期、後期、また平安時代の土器類や、石器類が盛んに出土している。下って戦国時代頃も集落を営んでいたようである。

即ち、地藏院裏より弘安三年（1280年）と建武三年（1336年）の板碑が出土している。また地藏院の歴史も古く、正和三年（1314年）の創立を伝えている。

亀久保がはっきりと歴史に登場してくるのは、江戸時代である。前から人が住んでいたろうが資料がなくはっきりしない。しかし今日の亀久保の源流は武州鉢形の城主北条氏邦の家臣で鉢形城が落城したため牢人となった三上山城守が川越周辺に落付き附近を開発したという。（「八ツ島」川越市）

山城が子正右衛門に至り慶長年間大塚村山城（川越市）より亀久保に移住した、と古文書にある。最初に入植した場所は亀久保の東、江川のほとりと称されている。亀久保の地名は村の中央に小流れあり、流れの姿亀に似たるを以って万代不易として亀窪と名付けたという。その地に三上氏が建てた石の祠が現在三上英治氏の宅地内に移管されている。

当初江川地名弁才天

社地有之取此地引

大弁才天

三上大明神

武蔵国 亀久保村

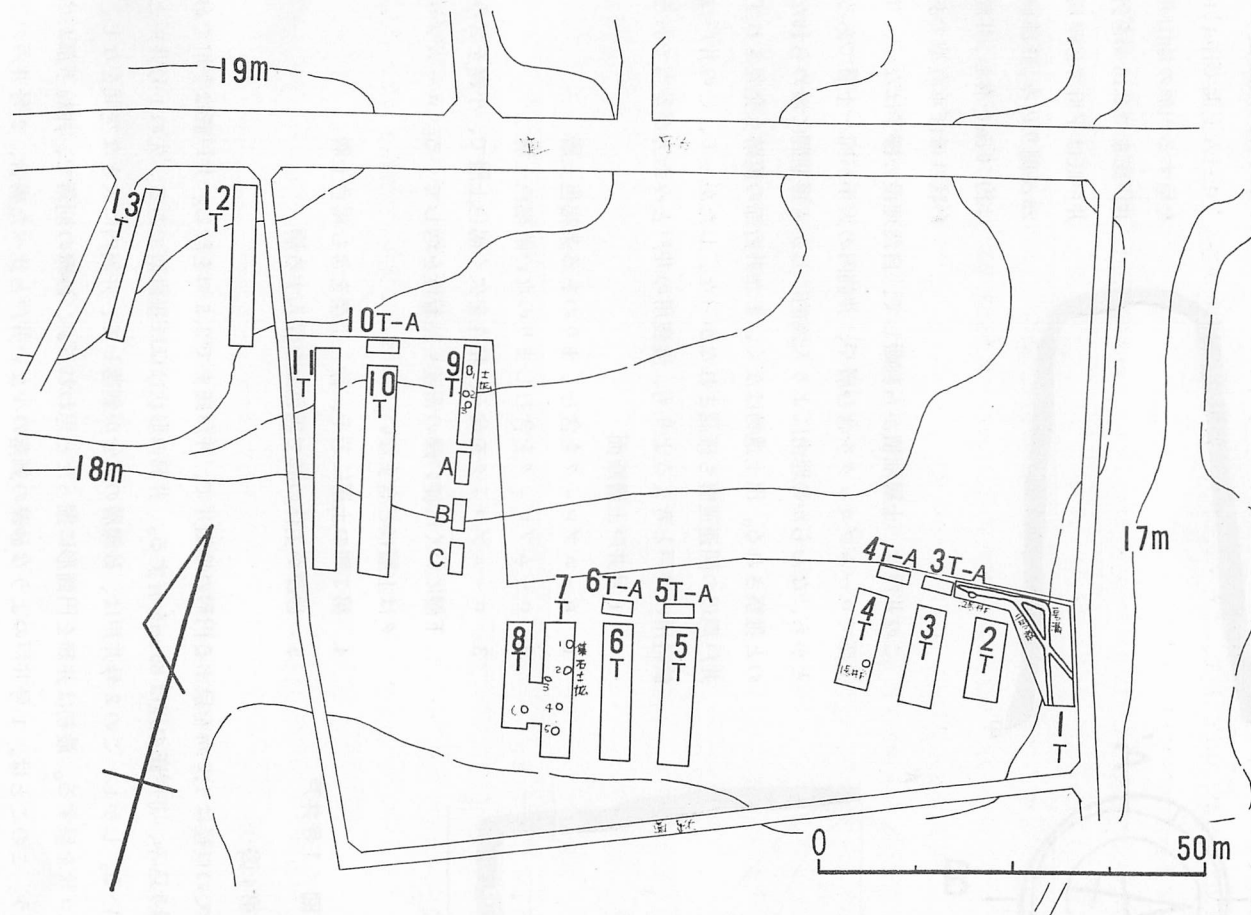
藤原氏

また近くに小陣場と呼ぶ場所がある。陣地の跡といわれているが、何んの戦かわからない。亀久保の地藏院境内にある薬師様はこの近くより島田氏の大本家の祖母さんの夢枕に出現して掘出されたと伝えられている。

なお小学校建設地より井戸跡が発見されたが近くを鎌倉街道が通っている。井戸を中心として一つの集落があったと思われる。

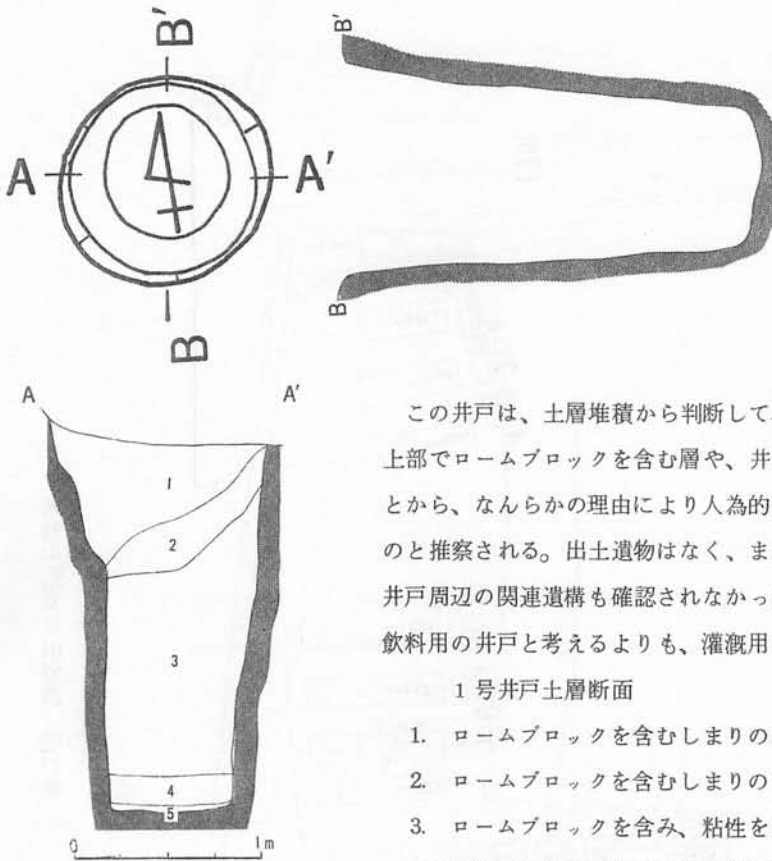
寛永十六年（1639年）松平伊豆守信綱が川越に入封し川越江戸街道が新設されて、江川周辺からこの街道両側へ順次移り住み、現在に至っている。想うに江川周辺は古代より揺らんの地であり、亀久保発生の地でもあった。

大井町文化財保護審議会委員 島田一郎



第2図 調査区の地形と遺構

Ⅲ 遺構と遺物



第3図 1号井戸

1. 井戸遺構

○ 1号井戸(第3図)

ローム上面で径1.1 mを呈する円形の地山井で井戸底まで2.15 mを計る。井戸底は平坦で砂礫層を25 cm掘り込み、底部直径は約70 cmを有し、井筒の形状はほぼ垂直型である。

この井戸は、土層堆積から判断して、自然埋没の様子はなく、井筒上部でロームブロックを含む層や、井筒内の大半が同一土層であることから、なんらかの理由により人為的にしかも短期間に埋められたものと推察される。出土遺物はなく、また井桁部の痕跡も発見されず、井戸周辺の関連遺構も確認されなかった。したがって、この井戸は、飲料用の井戸と考えるよりも、灌漑用の井戸とみた方が妥当であろう。

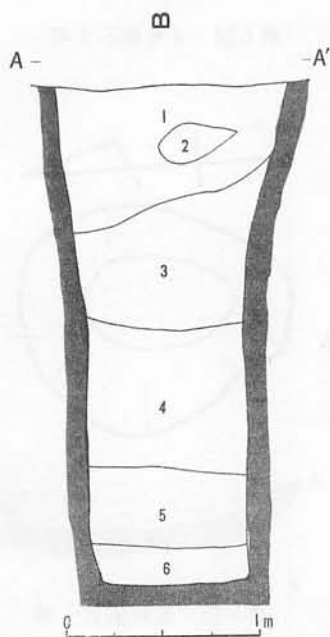
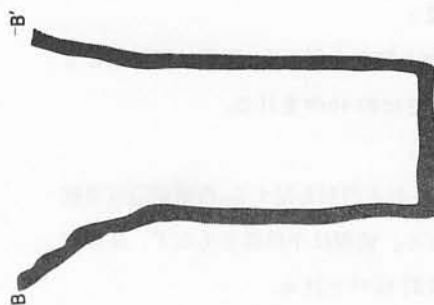
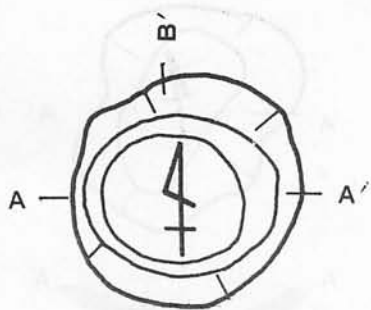
1号井戸土層断面

1. ロームブロックを含むしまりのある茶褐色土層
2. ロームブロックを含むしまりのない暗褐色土層
3. ロームブロックを含み、粘性を欠く褐色土層で、小礫を含み、下層にいくに従い礫の密度も粘着性を増してくる。ロームブロックは上層ほど含まない。
4. 第3層の土層に若干、砂・小礫を含む褐色土層
5. 砂礫が主体の層で黒色土を混入する層

○ 2号井戸(第4図)

ローム上面での口径は1.2 mを呈する円形の地山井で、井戸底まで2.5 mを計る。井戸底は平坦で砂礫層を約50 cm掘り込み、井戸底の径は85 cmを有する。井筒の形状はほぼ垂直型である。先の1号井戸と形状は酷似している。しかし、この2号井戸は、砂礫層の部分が剥落して、井筒内に大きな空間をなし、あたかもフラスコ状を呈する。最初は井筒を円筒形に掘ったと思われるが、砂礫の崩落で、井筒下部が広がったのであろう。このことは、1号井戸のような砂礫の剥落の少ない井戸と比べた場合、2号井戸の方が使用期間が長かったといえる。

出土遺物は発見されなかったが、井桁跡と思われる柱穴4ヶ所が井戸周囲から確認された。また、井戸の北に接して存在する溝状遺構は、2号井戸によって切られ、井戸と溝の併存は考えられない。また、2号井戸と溝状遺構(1号溝)との新旧関係は、2号井戸のプランが1号溝を切り込んでいるところから、



2号井戸の方が1号溝より时期的に新しいといえる。

以上2基の井戸遺構は形態的にみて、近世以降のものであり、二基共、飲料用に使用したものではなく灌漑用に使命を果たしたものであろう。武蔵野に堅掘りの井戸が出現するのは、近世初期以降であるから、当遺跡の井戸もそれ以後の遺構と思われる。

(坪田 幹男)

2号井戸土層断面

1. ロームブロック、砂を含む暗褐色土層
2. 小石を含むしまりのない茶褐色土層
3. 第1層と比べてロームブロックが少なく、色調も黒っぽい暗褐色土層
4. 大小の礫を含む暗褐色土層
5. 大小の礫を含む褐色土層
6. ロームブロックと第5層との混土層で黄褐色を呈する。

第4図 2号井戸

2. 集石土塙

本遺跡の7・8トレンチから発見されたもので6基を数える。

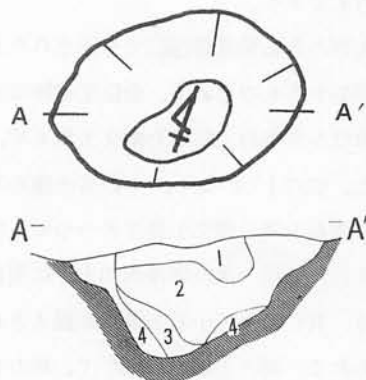
集石といっても、意識的に置いたものとは考えられず、土塙の覆土上部、及び覆土中に石が散在している土塙である。

○ 第一集石土塙

長径90cm、短径60cmの長方形を呈するが、西隅近くは南西に張り出している。張り出しの部分は他より浅く掘り込まれている。深さは約10～15cmで、褶鉢状を呈している。

○ 2号集石土塙

長径150cm、短径120cmの不正円形を呈する。底面は平坦



第5図 3号集石土塙

部をもたず、凹凸が激しい。

○ 3 号集石土壙（第 5 図）

長径 130 cm、短径 90 cm の卵形を呈する。底面は平坦部をもたず、褶鉢状となる。深さは約 40 cm を計る。

○ 4 号集石土壙（第 6 図）

長径 120 cm、短径 90 cm の不正円形を呈する。西壁周辺は東壁と比較して傾斜は急である。底面は平坦部をもたず、緩傾斜の褶鉢状となる。深さは約 15 cm を計る。

○ 5 号集石土壙（第 7 図）

長径 140 cm、短径 110 cm の不正円形を呈する。底面は平坦で深さは 22 cm を計る。

○ 6 号集石土壙（第 8 図）

長径 120 cm、短径 100 cm の不正円形を呈する。底面は平坦部をもたず褶鉢状となる。深さは 32 cm を計る。

以上 6 基の集石土壙で断面図を記録したものは、3・4・5・6 号土壙である。

1. 礫（5 cm 大の割石）を含むサラサラした軟い褐色土層
2. 炭化物を含み、しまりのある黒色土層
3. 軟い茶褐色土層
4. ロームブロックを大半含み軟い褐色土を混入する。
5. しまりがある暗褐色土層
6. しまりのない暗褐色土層

集石土壙の形態は不正円形がほとんどで、他に長方形のものがある。底面が平坦なものと、褶鉢状の底面を有するものがある。覆土中には、有機質の腐植土層があり、土壙墓という見方もできる。

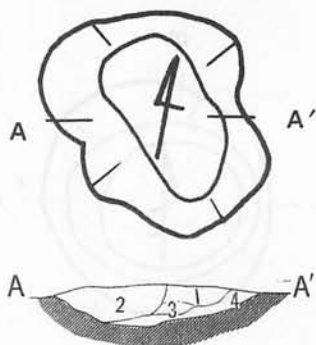
羽生市の念仏堂遺跡（註）で発見された土壙と、本遺跡のそれと類似するものもあり、念仏堂遺跡は土壙墓としている。

遺物は 5 号集石土壙から縄文土器 8 片、土師器 3 片が検出された。他の 1・2・3・4・6 の各土壙からは皆無であった。

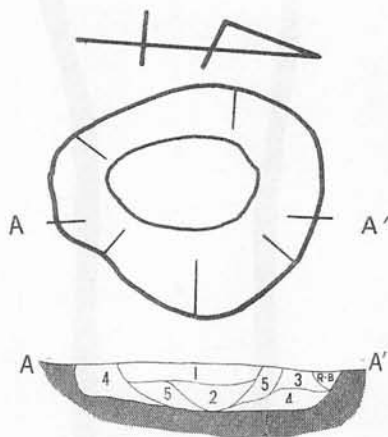
5 号集石土壙の縄文土器片の一つは、平行沈線が 5 本横にはしり、一つは一本の隆帯部の上下に変形の爪形文が施されている。共に胎土に小石と雲母が混入されており、阿玉台式と思われる。尚、土師器は細片で、杯の口縁部一片が確認されている。

（坪田 幹男）

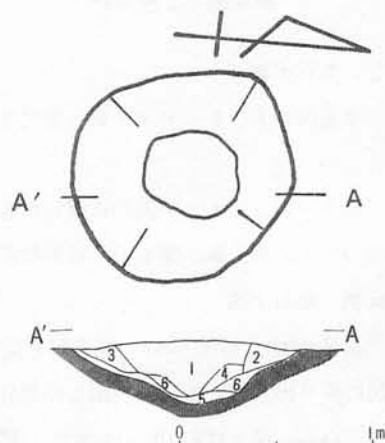
註「念仏堂遺跡」埼玉県遺跡調査会 1973 年



第 6 図 4 号集石土壙



第 7 図 5 号集石土壙



第 8 図 6 号集石土壙

3. 溝状遺構（第9図）

溝状遺構は、1・2トレンチの北側から2本発見された。

1号溝は、調査区域外の畑に沿って西から東走し、道路のところで直角に曲り、この道路に沿って南走するもので、ローム上面での幅は40～50cm、深さ30～40cmで断面はほぼV字型を呈する。覆土は最下層にロームブロックを大半含む黄褐色土（第2層）、その上にロームの小ブロックを含むサラサラした暗褐色土（第1層）、そして本遺跡のローム層上面を覆っているサラサラした褐色土（第3層）が一部に入りこんでいる部分もある。

2号溝は、1号溝の直角部をはさんで交叉するもので、ローム上面での幅50～60cm、深さ40～50cmで、断面はU字形を呈し、一直線状に延びている。覆土は、最下部にロームと褐色土の混土層（第6層）がみられ、その上にサラサラした褐色土（第5層）、一番上にしまりのある暗褐色土（第4層）が自然堆積している。

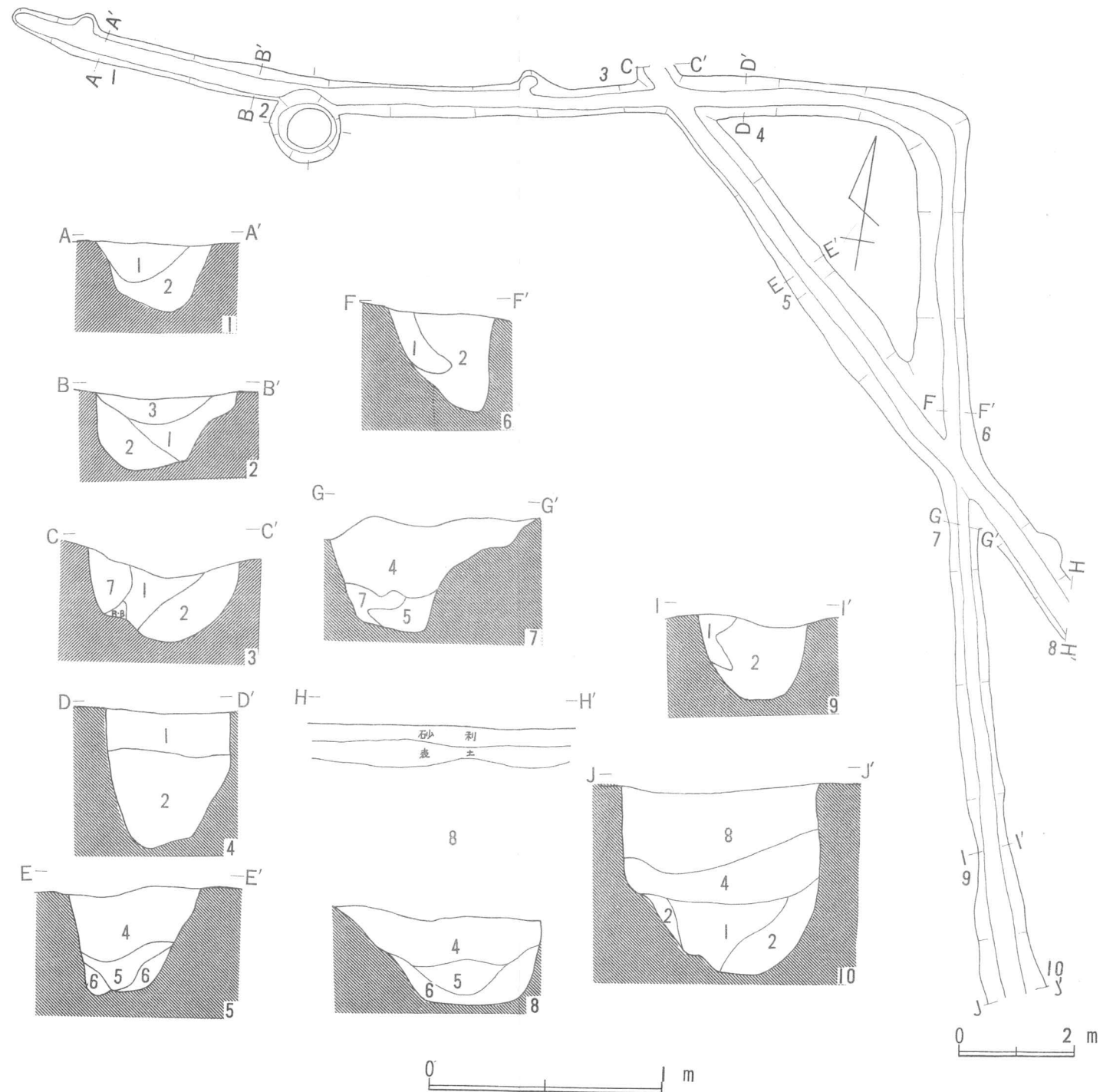
1号溝と2号溝の新旧関係は、両者の交叉する地点の土層を観察した結果、交叉地点に1号溝の土層堆積がみられたところから、1号溝の方が2号溝よりも新しいと言える。

この2本の溝状遺構についての性格は不明であるが、1号溝の走向が、今回の調査で確認された部分だけで言及するなら、現在の土地区割に沿って存在しているということと、土層堆積が粘質度を欠き人為的な埋土の可能性が強く、土層観察では水の流れていた形跡は明確でなかったことなどから、1号溝は、地境の溝とも考えられる。2号溝の場合、過去の土地区割が不明のためあてはめることは困難であり、又、別の性格ということも考えられる。

（坪田 幹男）

溝状遺構土層断面

1. ローム小ブロックを含む、しまりのない暗褐色土層
2. ロームブロックを大半含む黄褐色土層
3. しまりのない褐色土層でロームブロックを若干含む。
4. 粘性、しまり共にある暗褐色土層
5. しまりのない褐色土層
6. ロームと褐色土の混土層
7. ロームと暗褐色土の混土層
8. しまりのある暗褐色土層（一般にクロボク、クロマサと呼称されているもの）



第9図 溝状遺構

4. 土 壙

土壙は8トレンチから3基発見された。

○ 1号土壙（第10図）

平面形は不正円形で長径220cm、短径110cm、深さ約25cmを計る。壁は垂直に立ち、断面は箱形を呈する。覆土中にゴボウ掘りの痕跡が明瞭に残る。覆土は全体的に攪乱をうけ安定せず上部にロームブロックを含み堆積の仕方は不自然で人為的な行為をうかがわせる。

○ 2号土壙（第11図）

平面形は円形で長径150cm、短径120cm、深さ35cmを計る。壁はほぼ垂直に立上る。覆土は、底にしまりのない黒色層がみられるが、上部はロームブロックが混入している。

○ 3号土壙（第12図）

平面形は円形で長径150cm、短径120cm、深さ25cmで2号土壙と形態はほぼ同じである。

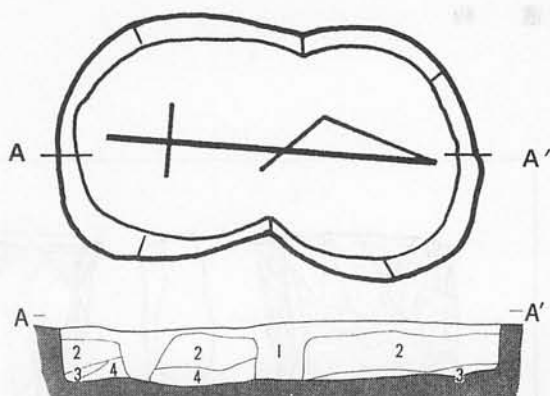
覆土も2号土壙と同じで、上部は攪乱層はいりこんでいる。

以上、3基の土壙からの出土遺物はなく、土壙の時期は不明である。形態からみて、2号・3号土壙は同時存在したと考えられる。また1号土壙は、平面プランでは不正円形を呈し、円形土壙が2つ接触した形である。2号・3号土壙と同時存在した可能性がある。

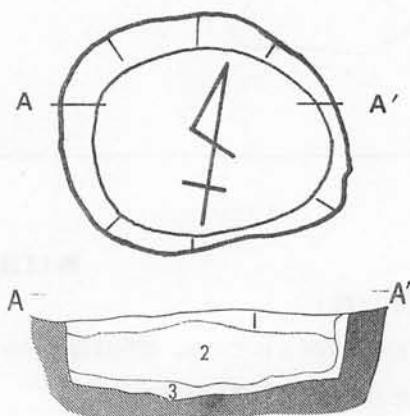
（坪田 幹男）

土壙土層断面

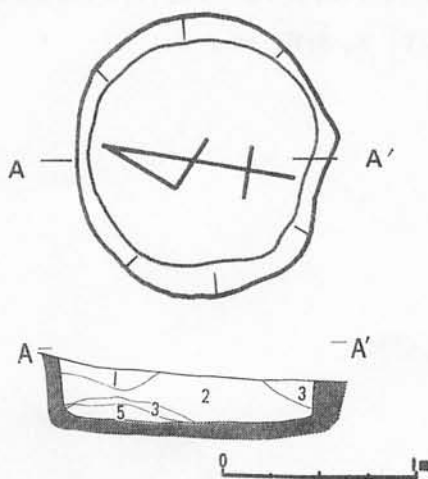
1. バサバサで、ロームブロックを若干含む茶褐色土層
2. ロームブロックを多量に含む攪乱層
3. しまりのない黒色土層
4. 第2層に近似しているが、ロームブロックを含まない褐色土層
5. ソフトローム



第10図 1号土壙

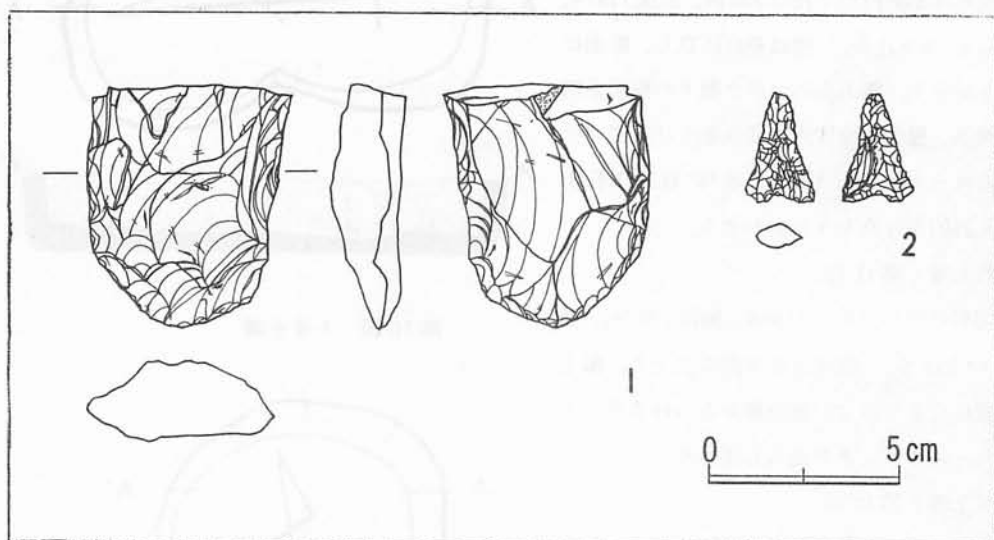


第11図 2号土壙



第12図 3号土壙

5. 遺 物



第13図 表採遺物

○ 打製石斧（第13図1）

頭部をかくもので切断されている。器形は撥形とみられるが、やや内そりをもつ感があり、表裏両面に剝離痕が、また刃部側辺に調整が認められる。

○ 石 鏃（第13図2）

基部は凹基を呈するが挟り込みが浅く内弯する程度にとどまり、二等辺三角形に近い形をもつもので尖頭部は欠損している。石質、チャート。

（小泉 功）

Ⅳ 総 括

当遺跡は、埼玉県遺跡地図によると古墳時代の集落となっていたが、調査の結果遺構としては「集石土壙」及び「土壙」、「溝」、「井戸」などが検出された。集石土壙をのぞき、何れも武蔵野の開拓に関係する近世以降の遺構である。

一般的に武蔵野といわれる地域はローム層が厚く、飲料水を得るのに極めて不便な地域であった。

井戸を掘ることが即開拓の歴史である。よって武蔵野台地の中央部に住むのには、深い井戸を掘らなければならなかったが、深く大きく垂直に掘り下げる技術が現代のように未だ発達していない中世には、土地を漏斗状に深く掘り下げ、その底に井戸枠を組み、地下水を汲みあげて飲料水としたのである。井戸を掘るための労力は大変なものであったから、「堀兼の井」の呼称も生まれたといわれている

「堀兼の井」は、1708年(宝永5年)川越城主秋元喬知によって修理されこの地域の新田開発が進められた。狭山市北入曾にある「七曲り井」は、水を汲む井筒に達するのに井戸の斜面をS字形に七曲りして目的を達することからこの呼び名が起ったといわれている。

先年発掘した「大井の井戸」は、これより形態として古式のものであり、台地斜面直下の窪地に掘りくぼめ、井筒中央寄りには石組みがあり、井戸の「まなこ」的存在と考えられる。

以上のことから飲料水の得がたい武蔵野台地は近世に至るまで開発が進まなかった地域であり、野火止は1653年に農家5戸を移住させて開発させたのにはじまるが、松平信綱の1655年に玉川上水の完成を期に野火止用水を開削した。この用水は飲料・家事用としてのみでなく水田灌漑にも利用されたのである。また柳沢吉保によって1694年三富新田は開拓された。幅4～6間の道路を縦横に通行し、これに沿って間口40間、奥行375間、面積5町歩を規準とする地割を行ない各所に深い井戸を掘り、近村から241戸を入植させ、南から西に向かって上富・中富・下富の3村をつくった。多福寺にある銅鐘(1696年製作)には三富開拓の歴史が刻まれている。

当発掘調査区の東側隣接地にも武蔵野の地名が残っている。現在行政的には上福岡市に属し、密集した市街化地域となり、その面影をみることはできないが、わずかにその名称を残すのみとなっている。

上福岡市武蔵野町に隣接する当遺跡の地域も武蔵野開拓の歴史的環境が一部によく保存され、その景観をとどめている。

今回の調査で検出された諸遺構もこれら開拓に関係する生活遺構を主としたもので、大井町亀久保の住民に極めて近い歴史的所産であり、現在につながりをもつ諸遺構とみなすことができよう。尚、武蔵野開拓の考古学的調査は、今後明らかにされるべき課題であり、当遺構の発掘調査はその端緒ともいえるものである。

(小泉 功)



1. 東久保遺跡全景（北より）



2. 1号井戸



3. 2号井戸

図版 2



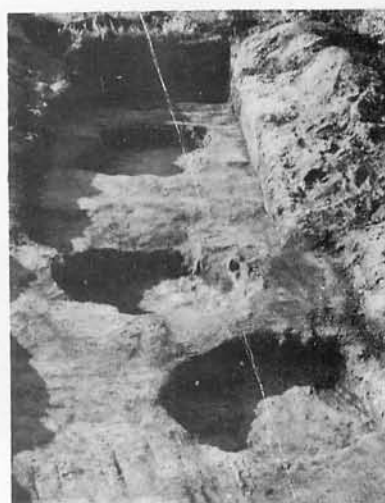
1. 1号溝



2. 2号溝



3. 集石土壙



4. 土壙（手前より3.2.1号土壙）



5. 表採遺物



6. 表採遺物

大井町文化財報告第7集

東久保遺跡

発行 昭和52年3月25日

編集
発行 大井町教育委員会

印刷 木塚プリント